

中学校特別支援学級における社会的・職業的自立を目指した 生活力を育成するためのカリキュラムの研究開発

檜和田 祐介・小田原 舞・藤井 朋子・西 勉・落合 俊郎*・若松 昭彦**

要約: グローバル化が一層進行するこれからの社会において、将来の就労を含む生活に向けた生活力の育成を目指し、時間割表の「職業・家庭」に新たに社会生活に関する内容を加味した教科「キャリアマネジメント」を教育課程に位置づけ、カリキュラム開発を行った。単元ごとの評価を観点別評価とキャリアの4能力によって授業を実践した結果、生徒や保護者・教員に対して学校設定教科のカリキュラムに一定の効果があった。指導内容の見直しなど、より一層の授業改善が今後の課題である。

キーワード: 特別支援教育, キャリア教育, 学習評価, 授業改善

I. 研究の背景

本校におけるカリキュラムの研究会衣鉢は、前期中等教育段階における特別支援学級在籍生徒の社会的・職業的自立を目指し、生活力を育成するための指導の在り方に対する提言を行うものである。

これまで本校特別支援学級では、特別支援学校学習指導要領および作業学習の手引き（改訂版・平成7年度）を基に、作業を活動の中心に据えた学習を展開してきた。平成21年度からは、それまで行っていた職場体験学習をジョブサポートティーチャーの指導を受けながら実施する形態に変更し、実際の就労を目指した取り組みを展開してきた。また平成22年度からは、職場体験学習と作業学習を関連づける試みとして、広島県教育委員会が実施している「技能検定」に準じた清掃スキルの指導を取り入れ、新しく作業種目「環境」を設定し、就労をより意識した指導を行ってきた。更に平成23年度は、新たな雇用を創出している社会的企業をモデルにして学習指導体制を組むことで、生徒相互の協力と、自らの役割を担って主体的に働くことを意味づけることが可能となった。

そして平成24年度は、新しい指導の形態「職業生活」を立ち上げ、指導体制の充実を図った。

これら一連の研究により明らかになった課題点として、次の3点を挙げるができる。

1. 社会情勢にかかわる課題

今日、障害のある者が地域社会の中で社会参加し、主体的に生活を切りひらき、かつ利用できる社会資源を積極的に活用することのできるような力として社会生活力が注目されている。障害者雇用促進法は社会変化に対応して、これまでに何度か改正が行われ、障害者雇用の促進にむけた取り組みが各地で実践され、雇用率も上昇してきている。さらに平成25年度になって法定雇用率が引き上げられる等、障害者の雇用をより一層進めていく必要が出てきている。職種についても以前は第1次産業を中心としたものが多い傾向があったが、接客や清掃といった第3次産業も増えてきている。雇用の拡大や職種の広がりに伴い、生徒自らが自分の興味関心や適性に応じ就労を考えていく中で、職業リハビリテーション等の就労支援へのニーズも多様化・複雑化している。また、受け入れ企業からは働くことへの意欲等に課題のあることが指摘されている。

2. 教育課程にかかわる課題

学校教育においてはキャリア教育が推進され、就労を意識した社会的・職業的自立を目指した特色ある実践が各学校で行われてきている。特別支援教育においては一般的に、職業的自立を意識した指導として、教科「職業・家庭」や合わせた指導の形態として「作業学習」、小学校段階では「生活単元学習」が取り組ま

れ、働くことへの基礎となる事項を学習できるよう教育課程が編成されている。しかしながら、職場においてはコミュニケーションや人間関係の形成に関わる力の他に課題を遂行していく力、任務を適切にこなせたかどうかを評価できる力、さらには将来にわたって主体的に生活していくことのできる力等も必要である。社会的・職業的自立のためには指導内容として教育課程に位置付ける工夫が必要である。

3. キャリア教育の推進に関わる課題

児童・生徒の勤労観、職業観を育てるキャリア教育への期待が年々高まっている。キャリア教育推進の方策として、社会、国語等既存教科や道徳の授業における関連づけ、発達段階に応じた教室での学習プログラムの開発、指導の工夫、改善等と並び、職場体験や職業人へのインタビュー等体験活動を通して社会の仕組みについての理解を深める取り組みが増えている。中等教育段階は進路の将来的選択期、進路の現実的探索・試行と社会的移行準備期とされ、職場体験学習を含む様々な実践が、各教科・領域で行われている。キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実践の成果も徐々に上がっている。また「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの能力領域が示され、小・中・高等学校で系統的に整理されたマトリックスが示され、整備が進んできた。しかしながら、キャリア教育は新しい教育活動を指すものではないとしてきたことにより、従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、体験活動が重要という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりすること等、各教科・領域で一人ひとりの教員の受け止め方や実践の内容・水準にばらつきがあることや、そのつながりが明確になっていないために系統性が不十分であること等の課題がある。

II. 研究の目的と仮説

これら諸問題の解決に向け、「職業生活」、「家庭生活」、「ライフキャリア」の側面から新たな教科として「キャリアマネジメント」を設定し、その指導目

標・内容・方法の開発を行う。

具体的には従来からある「職業・家庭」の指導内容にライフキャリアの視点を踏まえた内容を付加し、グローバル化する社会情勢に対応した新たな指導内容として特化する。

このカリキュラムを実施することにより、生徒のコミュニケーション力や社会生活・職業生活における技能の習得向上および自尊感情の高揚や職業に対する意識に変容が生まれ、生活力が高まることが期待される。

III. 実態把握

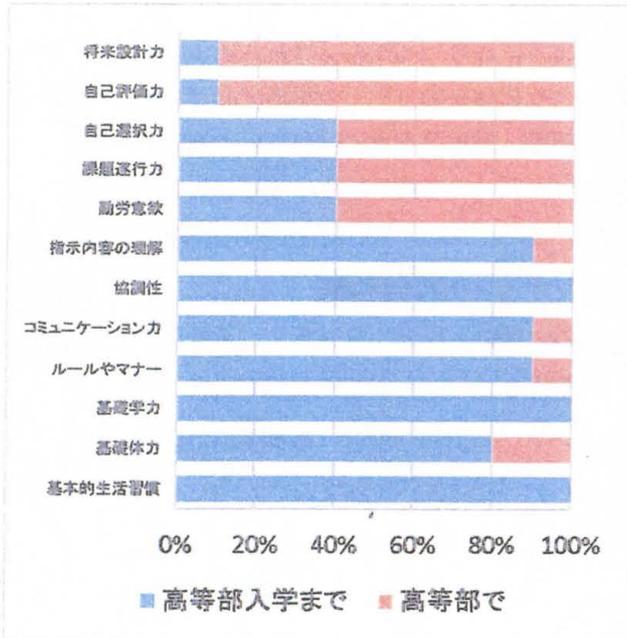
1. 広島県立特別支援学校（知的障害）教員に対するアンケート調査から

広島県内の特別支援学校（知的障害）〔本校10（職業コース3を含む）・分校1・分級2・分教室1〕の教員を対象に、本研究で生徒につけたい資質や能力について、その妥当性を検討するために質問紙によるアンケート調査を行った（平成26年10月～11月）。そのうち、本校7（普通科6職業コース1）、分校0、分級2、分教室1、の回答を得た。有効回答率は71パーセントであった。

アンケート調査の項目と結果を以下に示す。

- (1) 中高連携のために実施していること
- ①連携や交流のために行っていること
 - ・担当者の開催
 - ・設備や用具の共用
 - ・備品整備や原材料費に係る担当者間の協議
 - ・指導技術に係る合同研修
- ②良かった点
 - ・中・高の6年間で一貫性のある指導ができる。
 - ・中・高での合同研修を実施することで、指導技術が向上する。
 - ・各学部の作業担当者がわかり、責任の所在について共通理解ができる。
- ③課題点
 - ・同一の特別教室で指導するため、生徒数急増の影響を受けやすく、指導教室の不足が生じやすい。
 - ・年度初めに1回開催されるだけのため、学部間の連絡だけで終わっている。

(2) つけたい資質とその時期について



*各項目について○、特にそう思うものについては◎を記入していただいた。1つの項目に複数○、◎がついているものは、指導時期の早い方を抽出した。また、○と◎の両方があったものは◎を抽出した。

*つけたい力とその理由についての記述を次に示す。

①基本的な生活習慣

高等部でも継続するが、社会に出て必要な基本的な生活習慣は中学部までに身に付け、高等部ではその上で社会に出て活用できる力をつけたい。

②ルールとマナー

日常生活の基本的なルールとマナーは高等部3年間だけで身につけるのは難しい。小学部、もしくはそれ以前から基本的なルールとマナーを身に付けていかないと間に合わない。

③勤労意欲

働きたいという意欲と役に立っているという達成感、は高等部の早い時期から身につけていきたい。その上で職場実習等を重ね、就労につなげていくことが必要。

④課題遂行力

自分で解決する力をつけておきたい。社会に出て、考えて行動することなく待ちの姿勢では続かない。

(3) 他に高等部入学までにつけておいた方が望ましい資質・能力

①他者との距離感、プライベートゾーンの設定

・思春期に入り、特に異性との関わり方に課題が出てくるため。

・ルールやマナーの項目に属するが、幼児期から小学校期に、身体接触（手をつないで歩くや、抱きついて親しみを表すこと）を身につけ習慣化すると、高等部になってもそれが続くので。

②注視する力

・人が話をしている時には、その人の方を見ることが必要だから。

③忍耐力・持続力

・作業学習においては、同じ作業を繰り返し実施しながら、作業能力の向上を図るため。

④危険回避能力

・危機的な状況を理解できない生徒が多いから。「場」を読む力が弱く、苦手な生徒が犯罪に巻き込まれた経験がある。想定される状況をできるだけ具体的に提示し、スクリプトを作ることが必要であるから。

(4) 他に高等部入学後に高等部でつけることが望ましい資質・能力

①自己管理能力

・職場実習などが増えるため、保護者をあてにするのではなく自分で健康管理できることが必要だから。

②余暇利用能力（余暇を過ごす力）

・余暇の過ごし方を自分で選択して自由な時間を「楽しく」過ごせることが大切であり、ワーク・ライフ・バランスがとれ、より充実した生活、人生が歩めることが大切だと思うから。

・卒業後、休日等を適切に過ごすことができない場合、就労の継続にマイナスとなることが多いため。

③社会人として必要な基本的活動能力

・将来設計力の中に含まれると思うが、就労を希望する生徒にとって「社会人」は、「仕事をして家に帰る」だけでは、生活していることにならないから。家事や休日の過ごし方、冠婚葬祭の付き合い方等の活動を具体的に体験、学習し、身につけておく必要があるから。

2. 本学級生徒に対するアンケートから

本学級は、中・軽度の知的障害特別支援学級である。比較的規模の大きな学級集団であることを生かし、将来の社会的自立をめざし、生徒相互のかかわりを大切にしながら生活力を高める指導・支援を行っている。毎年4月に行っている個別の指導計画作成時のアンケート（図1）をみると、現段階での課題は生徒個々により異なっているが、コミュニケーションに関連するものが多くみられた。具体的には、文章表現や考えや気持ちの伝え方、一方的でないやりとりなどが挙げられた。

9月に本学級生徒を対象に行ったキャリア教育の基礎的・汎用的能力に関わるアンケート（図2）では、自己理解・自己管理能力に関する項目では肯定的な回答が多くみられるが、課題対応能力やキャリアプランニング能力に関する項目では「調べて分かったことをわかりやすく人に伝えるために、まとめ方を工夫している」や「なぜ勉強するのか考えて勉強している」などで、否定的な回答も多くみられ、自信のなさがかがえる結果となっている。

卒業後の進路については、ここ数年、生徒・保護者共に、実態に応じ、何らかの形で就労を含む社会参

まいで、漠然としている様子があるものの、上級生では進路決定も近づくことから、具体的な姿をイメージできるようになりつつある。これらの実態から、生徒一人ひとりの将来の自立した生活に必要な様々な知識・技能・態度等を身に付けていく指導や支援を系統的に行っていく必要があると考えられる。

IV. カリキュラム開発の概要

現行の「職業・家庭」を見直し、新たにライフキャリアの視点を盛り込んだ新たな設定教科「キャリアマネジメント」の指導内容を「職業生活に関するもの（しごと）」「社会生活に関するもの（くらし）」「家庭生活に関するもの（かてい）」に分類した。また、評価方法については従来の4つの観点（関心・意欲・態度/思考・判断・表現/技能/知識・理解）とキャリアの4能力（人間関係形成・社会形成能力/自己理解・自己管理能力/課題対応能力/キャリアプランニング能力）をクロスさせた16項目の観点を設定した。これによって生徒の成長の様子や授業について評価し、授業改善を行いながらカリキュラムの効果を測定することとした。次にキャリアマネジメント実施に当たって本年度定めた目標、育てようとする資質や能力、指導目標をあげる。

1. 目標

生涯にわたって社会参加に意欲を持てるようにするとともに、適切な自己の把握を通して、社会生活および職業生活・家庭生活に必要な基礎的な知識・技能と態度の習得を図り、実践的な態度を育てる。

2. 育てようとする資質や能力

- ①社会生活に必要なスキル
- ②就労への意欲
- ③自己有用感・自己効力感等の内発的な意欲
- ④自己の理解と把握による評価力
- ⑤課題遂行力

3. 指導目標

- (1) 自己の適切な理解に基づき集団の中で役割と責任を果たすことができるようにする。
- (2) 社会生活、職業生活、家庭生活に必要な知識と技能を身に付け、将来の自立した生活に向けた意

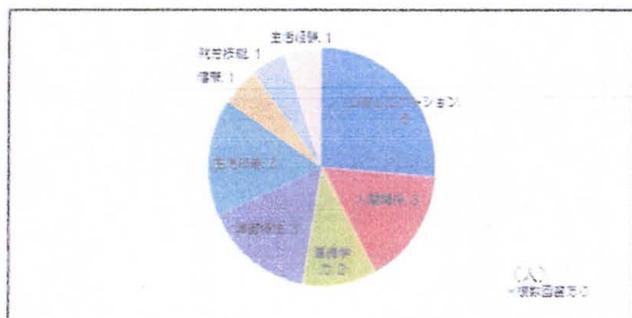


図1 課題だと考えていることに関するアンケート結果

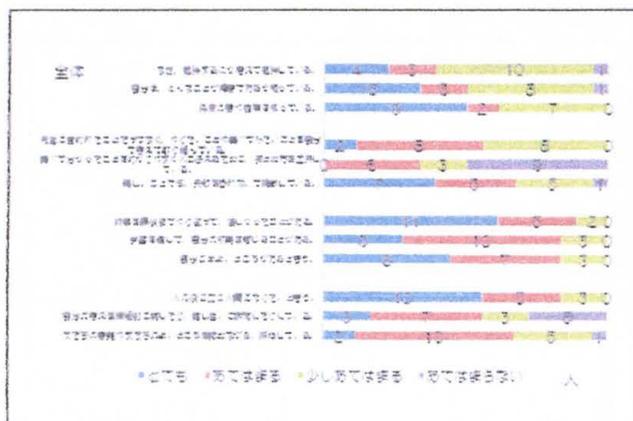


図2 基礎的・汎用的能力に関するアンケート結果

社会参加や働くことの目的等について尋ねると、あい

欲を持つことができるようにする。

(3) 教育課程 (図3), (図4)

学 年		1学年	2学年	3学年	総授業時数	
各教科	必修教科	国語	105	105	105	315
		社会	70	70	70	210
		数学	105	105	105	315
		理科	70	70	70	210
		音楽	35	35	35	105
		美術	70	70	70	210
		保健体育	70	70	70	210
	選択教科	外国語	70	70	70	210
	特例によって設置した教科	キャリアマネジメント	210	210	210	630
	道徳	35	35	35	105	
総合的な学習の時間	70	70	70	210		
特別活動	35	35	35	105		
自立活動	70	70	70	210		
合計		1015	1015	1015	3045	

図3 平成26年度各教科等の授業時数配当表

学 年		1学年	2学年	3学年	総授業時数	
各教科	各教科等を合わせた指導	生活単元学習	245	245	245	735
	必修教科	国語	70	70	70	210
		社会	0	0	0	0
		数学	70	70	70	210
		理科	0	0	0	0
		音楽	35	35	35	105
		美術	70	70	70	210
		保健体育	70	70	70	210
	選択教科	外国語	70	70	70	210
	特例によって設置した教科	キャリアマネジメント	210	210	210	630
道徳	0	0	0	0		
総合的な学習の時間	70	70	70	210		
特別活動	35	35	35	105		
自立活動	70	70	70	210		
合計		1015	1015	1015	3045	

図4 平成26年度指導形態別授業時数配当表

5. 指導形態について

「職業に関する内容」は原則として一斉および縦割りの3グループによる指導とする。ただし、課題学習システムおよび校内実習ならびに職場体験学習は学年別

の指導とする。

「家庭に関する内容」は学年別の指導とする。ただし、年間を通じて3分野「衣生活・食生活・住まい」を全て扱うこととする。

「社会生活に関する内容」は原則として学年別の指導とする。ただし、余暇活動や地域活動、交流活動に関わるものは全体での指導とする。

V. キャリアマネジメントの単元計画と実践例

単元の実施にあたり、すべての単元について単元計画を作成した。また、それぞれの単元について評価の観点を加えた。実施に当たっては、さらに各評価の観点を各3項目ずつに細分化し、よりきめの細かい評価ができるようにした。

以下に単元計画とその実践事例を挙げる。

キャリアマネジメント（しごと）分野 単元計画

単元名 「私たちの東雲コーポレーション」（クラフトグループ）

指導対象 東雲中学校 全学年3組 6名 クラフトグループ生徒

単元設定の理由

生徒の将来像として、社会生活や職業生活の中で、集団の一員として生きていく姿が想像される。そのような生活においては、他者との関係の中での自分を意識して行動できたり、協働して仕事をするのでできたりする力が必要となっていくと考えられる。（しごと）分野では、学年縦割りの3つのグループを編成し授業を行う。種目設定は特別支援学校高等部の作業学習で多く行われている種目や将来の社会生活および職業生活との関連、学校の人的設備的環境、生徒の興味関心を考慮した。会社に見立てた学習とし、それぞれの役割を分業し協力して作業を行うことで、他者と一緒に働くということ意識した言動やマナーを身につけたり、自分が役割を確実に果たすことの大切さを理解したりすることができる。指導にあたっては、授業開始時のミーティングや目標設定、授業後の振り返りを大切に、働き方を指導の中心にすえる。本グループでは作業工程をスモールステップに分解しやすい手工芸を中心にした製品作りを行う。個々の力に応じた行程を担当させ、達成感をもてるようにする。

指導目標

- (1) 使う人のことを意識して製品を考え、試作・改善をする中で、意見を交流させながら合意形成することができる。
- (2) 活動の目標に沿って、計画的に作業を遂行することができる。
- (3) 相手を意識した振る舞いやコミュニケーションをとることができる。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・社会形成能力	自分の考えや思いを相手に伝えることができる。	相手の意見を聞いて、自分の考えを正確に伝えることができる。	相手の思いや意見を正確に理解することができる。	分業について理解し作業することができる。
自己理解・自己管理能力	任された作業に意欲を持ち、遂行することができる。	自らの思考や感情を律することができる。	他者との協力や協働を主体的に行うことができる。	自分の持ち味を把握し、力を発揮することができる。
課題対応能力	自らが行うべきことに意欲的に取り組むことができる。	作業に応じた道具の選択ができる。	道具を安全・適切に扱うことができる。	指示を理解し、作業を行うことができる。
キャリアプランニング能力	集団の中での役割と責任を果たそうと、意欲的に作業に取り組むことができる。	目標に沿って作業を行っているか振り返ることができる。	目標に沿って作業を遂行できたか、達成度を評価できる。	自らが果たすべき様々な立場と役割を踏まえて作業を行うことができる。

個別の目標と支援（例）

個別の目標 自分の分担を遂行することができる。

支援 担当する作業の手順書を確認させる。

評価規準 自分の担当する仕事を確実にやり、次の担当者に受け渡すことができる。

（知識・理解、キャリアプランニング能力）

指導計画（全 68 時間）

第 1 次 商品開発（18 時間）

第 2 次 試作品作り，改善，商品作り（46 時間）

第 3 次 販売活動（4 時間）

学習の様子



製品作り



販売活動

指導上の工夫点・改善点

・企業見立ての指導

考える時間を大切にして指導を行った。各グループでリーダーとサブリーダーが中心になり、本時の目標設定を行うようにした。さらに目標が達成された状態を考え、学習の目当てを明らかにして学習活動に臨ませた。活動後には一つひとつの項目について評価を行い、全体でシェアするようにした。

・作業活動に取り組む上で守るべきことを話し合い、ルールとして設定した。授業始めのミーティングで唱和するようにし、意識を持って学習活動に臨めるようにした。

生徒の変容

- ・作業活動が仕事として理解され、必ずやり遂げようという意識が高くなってきている。自分たちで目標設定をしたことで、自分が何をがんばるのか、グループは何を目指しているのかが明らかになり、活動に取り組む姿勢や、製品の仕上がりもよくなってきている。課題を遂行する力も高まってきている。
- ・一緒に活動する仲間の良さを認め、同時に直してほしいことを伝えるなど、協力して頑張っていこうとする気持ちを表現できるようになってきている。

キャリアマネジメント（しごと）分野 単元計画

単元名 「職場体験学習②」

指導対象 東雲中学校 第3学年3組 6名（男子4名，女子2名）

単元設定の理由

中学3年生は昨年度中学2年生の時に3日間の職場体験学習を経験している。今回は同じ体験内容で、土日の休日を挟んだ4日間実習を行う。このように2回実施することで、生徒それぞれが前回の経験を活かし、工夫・改善を図る機会を得ることができる。そして、働くということについても前回との比較をしながらより考えを深めることができるものとする。

また、職場体験学習の期間中の休日に、本学級の卒業生である青年学級生が中学校に来校し、本学級の生徒と進路について語り合う会を設ける。このことによって、自分の進路を自分でイメージし、考えていけるようにしたい。

指導目標

- (1) 状況に応じたマナーを理解し、適切にコミュニケーションをとることができる。
- (2) 経験を活かし、適切な作業を判断しながら業務を遂行することができる。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・ 社会形成能力	あいさつや返事、報告、連絡をしようとしている。	状況を判断して、場に応じたあいさつや返事、報告、連絡をしている。	相手に伝わるようにあいさつや返事、連絡、報告をすることができる。	なぜ、あいさつや返事、連絡、報告をするのかわかる。
自己理解・ 自己管理能力	自分の役割を主体的に行おうとしている。	自分がやるべきことを判断できている。	自分がやるべきことに集中し、自制して取り組むことができる。	自分の仕事を理解し、自制しながら取り組むことがわかる。
課題対応能力	苦手な仕事にも意欲を持って取り組もうとしている。	仕事が適正に行われたかを正しく評価している。	仕事に応じた用具を適切に扱ったり、工夫したりすることができる。	うまくいかなかった原因や課題、改善すべきことを理解している。
キャリアプランニング能力	働くことに意欲を持っている。	どのようにしたらうまくいくかを考えることができる。	改善して行動することができる。	働くことの意義や自分の役割を理解している。

個別の目標と支援（例）

個別の目標 中学2年生の時の反省や課題をあげることができる。

支援 前年度の資料を使って振り返りをする。

評価規準 適切にコミュニケーションをとりながら、中学2年生時の課題に基づき、業務を遂行することができる。（技能、キャリアプランニング能力）

指導計画（全29時間）

第1次 実習先でのマナー（1時間）

第2次 公共の場で（2時間）

第3次 職場体験学習②（26時間）

学習の様子



学部棟の清掃



図書館業務

指導上の工夫点・改善点

- ・広島大学で福祉就労している職員やジョブコーチによる指導や、サポートティーチャー（学生ボランティア）の支援等を受けながら、学部棟の清掃や図書館での仕事を体験した。
- ・2年生の時に体験しているのので、2回目の職場体験学習である。前回の経験をもとに、生徒一人ひとりが目標を立てて臨むことができた。
- ・保護者参観の機会を持った。実際の様子を見ることで、どのような体験をしているか知ってもらっただけでなく、家庭で将来について話をする良い機会にもなった。
- ・サポートティーチャーに評価表の記入や生徒のしおりへのコメント記入をしてもらった。

生徒の変容

- ・2回目の体験で、見通しを持って臨んでいるので、関心・意欲・態度が高かった。
- ・個人で立てた目標を意識した言動が見られた。
- ・清掃に没頭するあまり、あいさつや返事を忘れる場面があったが、そのことに自分で気づき、改善しようとする姿が見られた。
- ・技能の向上やがんばりをほめられることで、自己の成長を実感し、疲れたが達成感を味わっている様子が見られた。自己肯定感の高まりにつながっていると推測される。
- ・生徒は、サポートティーチャーにすぐに評価してもらうことで、自分の良かったところや課題を確認することができ、具体的な目標を持って次の仕事に取り掛かることができた。

キャリアマネジメント（くらし）分野 単元計画

単元名 「進路を考えよう」

指導対象 東雲中学校 全学年3組 18名（男子14名，女子4名）

単元設定の理由

中学校卒業後の高等部になると、職場見学・実習といった実践的体験的学習を通して自分の進路を考える段階になる。このことを考慮すると、中学校段階では働くことはどうということか、自分の将来の社会生活をどうプランニングするか、といったことをイメージしておくことが必要であると考え。身近な先輩である青年学級生（本学級の卒業生）の話を聞いて様々な情報を得たり、働くことだけでなく余暇の過ごし方も含めた将来の社会生活について考えたりすることで、スムーズな高等部段階への移行、さらには就労の実現を目指したいとの考えから本単元を設定した。

指導目標

1年生…自己の特性を知り、将来の生活を考えることに関心が持てるようにする。

2年生…将来の社会生活への意欲が持てるようにする。

3年生…自己の興味・関心に基づきプランニングを行い、進路を切り拓くことに意欲が持てるようにする。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・社会形成能力	他者の意見を聞くことに意欲を持っている。	自分の思いを相手に伝えたり、他者の思いを受け止めたりしている。	相手の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりすることができる。	自分の置かれている状況や、自分に必要な知識や技能、能力態度がわかる。
自己理解・自己管理能力	自分の進路について前向きに考えようとしている。	自分の進路の実現に向けてやるべきことを判断している。	自分のやるべきことに集中し、自制して取り組むことができる。	自分がやるべきことを理解するとともに、ストレスへの対処の仕方がわかる。
課題対応能力	さまざまな情報を主体的に選択し、活用しようとしている。	進路の実現する上での課題を発見し、分析している。	課題の解決に向けて計画を立案し、実行することができる。	進路実現に向けての課題をどのように解決していけばよいか理解している。
キャリアプランニング能力	自分の将来設計を立てることに意欲を持っている。	さまざまな情報を取捨選択・活用している。	進路実現に向けて主体的に行動し、改善することができる。	学ぶことや働くことの意義を理解している。

個別の目標と支援（例）

個別の目標 自分が将来やりたいこと、なりたいことをあげることができる。

支援 ワークショップ型の学習を取り入れる。

評価規準 一人ひとりが自分の未来予想図を描くことができる。

（関心・意欲・態度，キャリアプランニング能力）

指導計画（全8時間）

	中学1年生	中学2年生	中学3年生
第1次	進路を語る会（2h）	進路を語る会（2h）	上級学校の生活（2h）
第2次	私の未来予想図（2h）	私の未来予想図（2h）	進路を語る会（2h）
第3次	私と生活（2h）	仕事と生活（2h）	余暇の過ごし方（2h）
第4次	余暇の過ごし方（2h）	余暇の過ごし方（2h）	私の未来予想図（2h）

学習の様子



進路を語る会



未来予想図（1学年）

指導上の工夫点・改善点

- ・「進路を語る会」では、どのグループにも中学生と青年学級生、親の会（在校生及び卒業生の保護者）がバランス良く入るようにグルーピングし、いろいろな立場からの発言が出て共有できるようにした。「社会に出て大切なこと」というテーマで意見交換し、出た意見を付箋紙に記入し、内容によって「健康・生活」「コミュニケーション」「マナー」「学習」の4つに分類した。
- ・「私の未来予想図」では、どのような仕事をしたいか、その仕事はどのような仕事内容があり、自分はどのような仕事内容をしたいのかを具体的に考えるようにした。また、仕事と家庭生活がつながるようなプランを考えるよう促した。

生徒の変容

- ・「進路を語る会」は、卒業生の話を直接聞くことで、将来の生活に対するイメージを持ち、進学や就労で何が必要かを具体的に知ることができた。見通しを持つことで、自分の進路を自ら考え切り拓く意欲を持つことにつながった。また、各家庭への進路に関わる話題を提供したり情報交換したりする機会になり、生徒が家族とともに進路について話合うきっかけになった。
- ・「進路を語る会」で卒業生の話を聞いたことによって、「私の未来予想図」「上級学校の生活」の学習で自分の将来を具体的にイメージして考えやすくなった。

キャリアマネジメント（くらし）分野 単元計画

単元名 「地域とのつながり」

指導対象 東雲中学校 2学年3組 6名（男子5名、女子1名）

単元設定の理由

自分の暮らす地域のことを知ったり，地域の中で自分のできることを考え行動したりするなど，自分も社会の一員として，地域と自分のつながりについて考え意識し行動できる力が，将来の社会生活をより豊かにすると考える。本単元では，地域の清掃活動を行うという学習を通して，自分にもできる地域貢献を体験する。地域の清掃活動は，何かを販売し収入を得るといったような直接的な見返りのない活動であるが，人には見えないところにも，人の役に立つ役割が存在することを知り，自らもやってみようとする意欲が高まるようにしたい。

指導目標

- (1) 自分も社会を構成している一人であることを意識することができる。
- (2) 周りの人の役に立つ行動を意欲的に行うことができる。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・社会形成能力	自分も社会の一員であることに興味を持つことができる。	地域の人々のことを考えて，自分のできることを考えることができる。	地域の人々のことを考えて行動することができる。	自分も地域で暮らす一人であることを理解できる。
自己理解・自己管理能力	任された作業を最後まで遂行することができる。	他者と協力の場面で，より良い行動を選択することができる。	他者との協力や協働を主体的に行うことができる。	自分の持ち味を把握し，地域の中でできることを考えることができる。
課題対応能力	自らが行うべきことに意欲的に取り組むことができる。	自らが行うべきことを判断し行動することができる。	行動に必要な準備を他者と協力して行うことができる。	自らの役割を理解し，行動することができる。
キャリアプランニング能力	社会の一員としての役割と責任について興味を持つことができる。	目標に沿って行動できているか判断することができる。	目標がどれくらい達成できたか評価することができる。	社会の中で自らが果たすべき様々な立場と役割を踏まえて行動することができる。

個別の目標と支援（例）

個別の目標 自分にできる地域貢献活動を発表できる。

支援 体験者の話や生徒会通信による情報を提示する。

評価規準 自分から進んで活動に参加し，最後までやりきることができる。

（関心・意欲・態度，課題対応能力）

指導計画（全4時間）

- 第1次 地域のためにできること（1時間）
- 第2次 地域貢献活動（2時間）
- 第3次 活動を振り返って（1時間）

学習の様子



清掃活動 駅周辺でのようす



清掃活動 学校周辺でのようす

指導上の工夫点・改善点

- ・一人ひとりが考えや意見を出しやすくするため、また、話し合う場面や注意事項の確認などを確実に行うことができるようにするため、少人数のグループで活動するようにした。
- ・天候が良くなかったこともあり、地域の人に出会うチャンスがなかった。地域とのつながりをより実感できる活動の工夫が必要であると感じた。
- ・校外での活動のため、特に安全には配慮した。しかし、実際には車道に落ちているゴミを拾おうとするなど、想定される危険については細かく指導する必要がある。

生徒の変容

- ・お互いのグループの様子が気になり、競いあうように活動した。効率よくゴミを拾うための動きや役割など、生徒自らが工夫して活動した。
- ・計画段階では消極的だった生徒から、活動途中に「いっぱいゴミが取れるのがたのしい」といった声があがり、積極的な活動になっていた。
- ・事後のアンケートでは、生徒会の行っている、「ボランティア活動にも参加してみよう」という意見や、「次は、とおくに行ってゴミを拾いたい」「また、きたなかったらきれいにします」「日本全国きれいにしたいです」など、活動の広がりや意欲的な記述がみられた。

キャリアマネジメント（しごと）分野 単元計画

単元名 「校内実習をしよう」

指導対象 東雲中学校 第1学年3組 6名（男子5名，女子1名）

単元設定の理由

中学校・高等学校は学校から地域社会へと生活の場を広げていく時期である。生活も家庭や学校を中心としたものから働く生活を少しずつ考えていく段階にあり，徐々に職業への関心を高めていくことが必要である。その第1段階として第1学年では校内で働いている職員から指導を受け，日々見ている身近な仕事に関心を持たせたい。また，その経験を通して，職業生活に必要な身だしなみやマナーを学ばせたい。

指導目標

校内で仕事をする環境職員から指導を受けることを通して，身近な仕事への関心を高めるとともに，身だしなみ，あいさつ等のマナーを身に付ける。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・社会形成能力	働くために必要なマナーに関心を持つ。	どのような挨拶やふるまいが適切であるか考える。	様々な仕事に挑戦する。	社会には様々な仕事があることがわかる。
自己理解・自己管理能力	実習に進んで取り組もうとする。	自分で状況を考え，適切なふるまいをする。	一定の時間指示内容に沿った作業ができる。	自己の適性に合った業務内容があることがわかる。
課題対応能力	指示された仕事をやってみようとする。	仕事を無駄なくこなそうと工夫する。	指示された仕事を遂行することができる。	業務に応じた適切な用具があることがわかる。
キャリアプランニング能力	作業計画に沿って仕事をすることに意欲を持つ。	どのような計画を立てるのがよいか考える。	実習計画を立てることができる。	計画を立て，作業をする必要があることがわかる。

個別の目標と支援（例）

個別の目標 必要な場面であいさつや返答をすることができる。

支援 あいさつや返事のモデルを示す。

評価規準 自分からあいさつをしようとしている。

（思考・判断・表現，人間関係形成・社会形成能力）

指導計画（全6時間）

第1次 身だしなみや職場に必要なマナー（あいさつ，返事）がわかる。（2時間）

第2次 校内実習（職業体験実習）を行う（4時間）

①実習の計画 ②実習 ③振り返り

学習の様子



草の掃き集め作業



芝刈り機の操作体験

指導上の工夫点・改善点

- ・本校の環境職員の業務を体験した。
- ・はじめは指導職員との関係が作りにくく、声を出すことも少なかったが、作業を進める中で、自分から質問したり、完了の報告をしたりするなど、活動がスムーズになった。
- ・質問コーナーを設定し、日ごろ話すことの少ない環境職員の先生方の業務について知るとともに、あいさつや身だしなみなどを意識できるようにした。

生徒の変容

- ・事前には活動時間が長いと不満に思っていた生徒もいたが、事後には、もっとやりたいという発言が見られた。
- ・実際の用具は想像以上に重たく一件簡単そうに見えた業務が、相当大変だということや、環境の先生は雨の日は道具のメンテナンスをしているなど、毎日多くの業務があり、新たな発見があったという感想を持つ生徒もいた。
- ・仕事の大変さ、見えないところでの苦勞を聞くことができ、働くことを考えるうえで楽しいだけではないということが体感できたようである。

キャリアマネジメント（かてい）分野 単元計画

単元名 「家庭 食生活」

指導対象 東雲中学校 2学年3組 6名（男子5名，女子1名）

単元設定の理由

将来的な自立と社会参加を視点とし，必要な課題への実践的な態度を習得させる。成長期にある生徒の食生活において，課題が山積する実態がある。具体的には，簡便なインスタント食品の多用や偏食による野菜不足，あるいは夜間の間食や一人で食べるなどの食習慣がみられる。栄養バランスのとれた食事，規則正しい三食のリズムの重要性に気づき，また食を通じた人と人とのつながりや，食文化の継承への思索を深め，生涯を通して健康な生活を送るための「食に関する知識や技能」を学ぶために，本単元を設定した。

指導目標

自分の身の回りの食環境に関心を持ち，健康で安全に暮らす食生活を自ら整えることができるようにしていく。

- (1) 自分の食生活を振り返り，身の回りの食環境に関心を持つことができる。
- (2) 食事の役割について理解し，栄養バランスのとれた食材の組み合わせを考えた「献立」を作ることができる。
- (3) 基本的な調理器具の名称や適切な使用方法を理解し，安全で衛生的に調理実習を行う。活動に見通しを持ち，分担と協力を行い最後まで集中して取り組むことができる。
- (4) 食事をするマナーやエチケットを知り，周りの人とともに楽しく食事ができる。

評価の観点

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
人間関係形成・社会形成能力	共に生活していく 家族や地域社会について食の面から関心を持つ。	健康的なバランスのとれた食生活や安全な食環境について考える。	分担・協業して調理実習などの活動ができる。	家庭内や地域で暮らすための「食のありかた」を理解できる。
自己理解・自己管理能力	自分の周りの食環境や他者との違いに気づく。	自分にとって健康的な食生活とは何かを考える。	簡単な献立を作り，調理を行うことができる。	自分の課題と役割について理解できる。
課題対応能力	バランスの良い食生活に関しての関心を持つ。	食生活の中での問題点を判断し，完全策を考えることができる。	目的にあった調理器具を安全に使用することができる。	なぜ栄養バランスが重要かを正しく理解する。
キャリアプランニング能力	健康的な生活について考え，「食」への関心を持つ。	どのように食べて，いきいきと暮らしていくかを計画することができる。	継続的に栄養バランスを振り返り，日常生活の改善を図ることができる。	人にとって安全で健康的な食環境について理解し，実践に努める。

個別の目標と支援（例）

- 個別の目標 必要な用具を自分で選ぶことができる。
調理器具の正しい扱い方がわかる。

支援 絵カードや具体物を使って示す。
作業分担を示し、必要な用具を明らかにする。

評価規準 必要な器具を使用して調理実習を行うことができる。(技能, 課題対応能力)

指導計画 (全 70 時間)

第 1 次 自分の食事内容や社会の食環境を振り返り、栄養バランスの理解と食材の安全を理解する。(24 時間)

第 2 次 健康的に生活するための基礎を学び、献立を立案し、調理ができるようになる。(23 時間)

第 3 次 食事のマナーに関する理解を深め、活用する方法を学ぶ。(23 時間)

学習の様子



食品の
栄養素別分類



調理
(ピザトースト)

指導上の工夫点・改善点

- ・食生活の振り返りをチェッククイズ方式で行うことで、「注意すべきポイント」が具体化され、食の課題を理解しやすくなり、また授業者側にも生徒実態が明確になった。
- ・栄養素の働きと食品群を理解させるため、各自の希望で分担し図表作成に取り組んだ。視覚的に一覧でき、把握しやすくなった。
- ・調理にあたり、各自の技能が異なるが、ペアチームで分業・協業することで、達成感を持たせることができた。声をかけあって安全に留意しあったり、切り方や盛りつけを工夫したり、最後まで集中して作業できた。
- ・知識の理解と技能の修得をバランス良く進めていくことに努めたが、さらに食環境や食文化への幅広い関心を深め、「食」を基点にして将来の生活に繋がる生活力を獲得できるよう、教材の工夫が一層必要である。

生徒の変容

- ・「食」(食いたい・食品)への意欲は高いが、経験の少なさから食の安全や添加物等の問題意識はあまり高くない。また栄養に関する知識や調理技能にばらつきがみられた。しかし、自らの「食」を振り返る学習を進めるにつれて、安全で健康に暮らすための食生活への興味が高まり、栄養バランスを考えた食材選びや献立プランに結びついていった。
- ・簡単な朝食の献立を考察し、作業分担して調理実習を行った後、作る面白さや楽しさに気づき、自発的に家庭でアレンジメニューを実践する生徒もいた。反面、依然として「包丁が怖くて、洗い物ができない」「両手の使い方がうまくいかず、切り方が危うい」生徒や、「自分の持ち場を譲ってしまって、他人任せ」という生徒もおり、時間をかけた支援が必要な実態がある。

<授業実践例>

単元名 キャリアマネジメント（くらし）
「説明会をしよう」

対 象 東雲中学校特別支援学級生徒 18 名

指導目標

- (1) 自分の役割と責任を意識し、担当する役割を遂行することができる。
- (2) 計画に沿った見通しのある活動ができる。
- (3) 考えたことを説明したり、質問に回答したりすることができる。

指導計画（全8時間）

- 第1次 説明会の実施について（計画・準備）
（3時間）
- 第2次 学年別の活動と説明会準備（3時間）
- 第3次 説明会（1時間）……（本時）
- 第4次 説明会を終えて（1時間）

本時の目標

- (1) 説明する時は、学習した内容を適切に説明することができる。
- (2) 質問を受けた時は、質問の意図に応じた内容で応答することができる。

評価の観点（網掛け部分は本時の重点）

	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
社会形成能力 人間関係形成	協力して説明会を行うことに意欲を持つ。 ア. 目的を持って活動する。 イ. 協力して活動する。 ウ. 仲間に活動を働きかける。	他者の意見を取捨選択できる。 ア. 自分の意見を持つ。 イ. 他者の意見に共感する。 ウ. 意見の相違を判断する。	他者や自分の意見から説明にふさわしい意見を選択することができる。 ア. 意見を述べる。 イ. 反論する。 ウ. 適切な意見を選択する。	自らの意見を伝えるよりよい方法を理解することができる。 ア. 伝え方がわかる。 イ. 様々な伝え方をあげる。 ウ. よりよい方法がわかる。
自己管理能力 自己理解	学習したことを伝えることに意欲を持つ。 ア. 伝えたいことがある。 イ. 伝え方に興味を持つ。 ウ. 繰り返し伝える。	よりよく伝わる方法を工夫することができる。 ア. 意見を修正する。 イ. 修正する方法を示す。 ウ. 自他の比較をする。	学習したことを伝えることができる。 ア. 必要な内容を伝える。 イ. メモを見ながら伝える。 ウ. 相手を見て伝える。	活動によって学習したことを理解できている。 ア. 資料を見て想起する。 イ. 活動の目当てがわかる。 ウ. 学習したことを話す。
課題対応能力	自分の役割を意欲的に遂行することができる。 ア. 自分の役割がわかる。 イ. 役割に沿って活動する。 ウ. 見通しを持っている。	質問された内容に適切に回答する。 ア. 答える内容を考える。 イ. 質問の意図を判断する。 ウ. 想定外の質問に応じる。	自らの役割遂行のために行うべきことを判断し行動することができる。 ア. 今行うことを考える。 イ. すべきことを判断する。 ウ. 課題順に配列する。	学習活動の内容を理解し、課題に応じた活動ができる。 ア. 活動内容を理解する。 イ. 活動に必要な準備がわかる。 ウ. 目的に応じた活動ができる。
プランニング能力 キャリア	今後の活動のための改善点を考えることに意欲をもつ。 ア. 改善点に気付く。 イ. 改善点の有無を考える。 ウ. アドバイスする。	質問される内容を考える。 ア. 質問をあらかじめ予測する。 イ. 答え方を複数考える。 ウ. 答え方を判断する。	今後の活動に生かせる意見を発信することができる。 ア. 自分の感想を伝える。 イ. 自分の意見を伝える。 ウ. 改善点を伝える。	学習の目的や内容を理解し、他の学習に生かそうとすることができる。 ア. 生活の中で生かす。 イ. 学習内容と関連付ける。 ウ. 関連する内容を見つける。

本時に関わる、生徒の実態と個別の目標、支援(例)

生徒	学年	本単元に関わる実態	個別の目標と評価の観点	目標達成のための支援
C	1	発語が不明瞭なため、考えや思いはあるが自分の意見を言葉で表現することに苦手意識があり、相手を直視できないことがある。メモや原稿を事前に作成すれば安心して伝えることができるようになっている。	相手を見て、自信を持って説明する。 技能/自己理解・自己管理能力 …ウ	原稿を活用し安心させる。

		学習活動 (○) と支援 (●)	指導上の留意点 (◆評価)		
導 入	本時の学習について				
	<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつをする ○本時の活動内容を確認する。 ○説明担当者は各会場に移動しスタンバイする。 ○総合司会者は各会場の説明内容を説明する。 ○誘導係が各会場へ案内する。 	<input type="checkbox"/> 運営で生徒ができる部分は任せる。			
展 開	説明会をする				
		1 年生	2 年生	3 年生	
		<ul style="list-style-type: none"> ○活動内容の説明。 <ul style="list-style-type: none"> ・調査の目的 ・活動の内容 ・わかったこと ●聞き手に向かって説明するように促す。 ……生徒C ●原稿を使わせる。 ●滞るようであれば活動を促す言葉がけを行う。 ●ストップウォッチでタイムキープを促す。 ○質問に应答する。 <ul style="list-style-type: none"> ●質問内容を復唱し、考える時間をつくる。 ●質問内容に応じ、きっかけになる言葉を提示する。 *3回繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○活動内容の説明。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の目的 ・活動の内容 ・まとめ ●聞き手に向かって説明するように促す。 ●説明用の写真と原稿を使わせる。 ●説明の内容を事前に確認させる。 ○質問に应答する。 <ul style="list-style-type: none"> ●質問の内容を理解しやすい言葉にして伝え考えさせる。 ●応答しやすいように、ヒントになる言葉を提示する。 *3回繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○活動内容の説明。 <ul style="list-style-type: none"> ・活動の目的 ・活動の内容 ・まとめ ●聞き手に向かって説明するように促す。 ●メモを持たせる。 ●カード等を用いるようにする。 ○質問に应答する。 <ul style="list-style-type: none"> ●質問内容に応じて、担当者が答えるよう促す。 ●応答に困るようなら、きっかけになる言葉を提示する。 *3回繰り返す。 	<input type="checkbox"/> 説明しやすい雰囲気をつくる。 ◆学習したことを伝えることができる。(技能/自己理解・自己管理能力) <input type="checkbox"/> 質問には、生徒自らの言葉で答えさせるようにする。 ◆質問された内容に適切に应答する。(思考・判断・表現/課題対応能力) <input type="checkbox"/> 時間に留意し、説明会の運営をスムーズにする。
ま と め	本時の振り返り				
	<ul style="list-style-type: none"> ○評価表に記入する。 ●選択肢を例示する。 ○説明会を振り返って感想を発表する。 ○説明会参加者から感想を聞く。 ○あいさつ 	<input type="checkbox"/> 生徒の感想の良いところをとらえ、肯定的な評価になるようにする。			

VI. カリキュラム実施による生徒への効果と課題

1. 授業観察による生徒の様子

授業観察における生徒の様子を見とる方法として、単元ごとに作成した観点別の評価を基に、生徒一人ひとりについて個別の目標を設定し、授業後のカンファレンスにおいて評価を行った。また、役割を担う場面を設定したり、自己肯定感を高められる言葉かけや共有体験ができるような場を設定したりするなどし、授業を計画し指導支援を行った。事前の授業の確認を行うことができるようになった者や、自分の役割を理解する事で、長時間にわたり、落ち着いて作業に取り組む事ができるようになった生徒や、生徒間での話し合いを行う場面で、意欲の持てなかった生徒が付箋を使用して書き出すことで発表につながるなど、学習や活動の場面において変化が見られた。

2. 単元実施による資質や能力の向上

6月のキャリアウィークIで2学年生徒が実施した、社会生活に関わる内容(くらし)分野の単元「地域とのつながり」では、通学路の清掃活動を実施した。授業後の振り返りでは「次は、とおくに行ってゴミを拾いたい」「また、きたなかつたらきれいにします」「日本全国きれいにしたいです」などと活動の内容だけにとどまらず、今後の活動の展開をイメージする内容が見られた。

10月から11月にかけて実施した、社会生活に関わる内容(くらし)分野の単元「説明会をしよう」で説明する内容として、1年生は「安全マップ作り」(くらし)、2年生は「プレ職場体験学習」(しごと)、3年生は「ボランティア活動」(くらし)の各学習活動を選択した。その学習活動を実施するための計画を自分たちで考え実行するとともに、活動内容や考えたこと等をまとめ、第三者に説明する一連の学習課題を設定した。

授業直後の振り返りシートの記述には「自分の役割ができた」「質問に答える事ができた」「みんなに伝える声の大きさを話した」などの意見があった。

次の図4は、1年生(6人)を対象に、「説明会をしよう」単元終了後に行ったアンケート調査の結果である。

アンケート調査では、各単元について、キャリアマネジメントにおいて育てようとする資質・能力 ①社会生活に必要なスキル ②就労への意欲 ③自己有用感・自己効力感等の内発的な意欲 ④自己の理解と

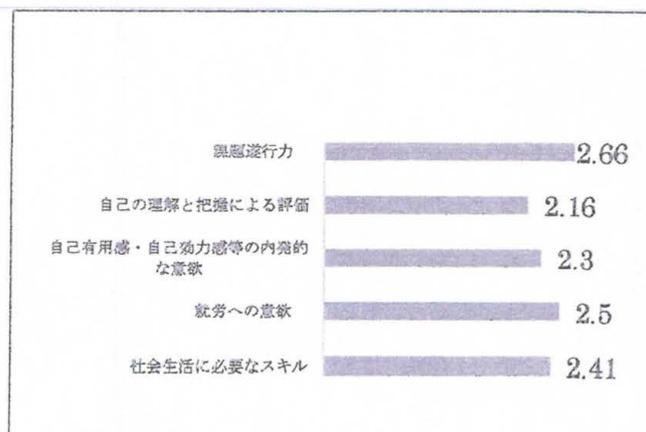


図4 生徒の自己評価

把握による評価力(⑤課題遂行力)に関する質問を行い、選択肢と記述によって評価を行った。各項目を3点満点で評価し、その平均値である。継続して、付けたい資質や能力について分析していくことで生徒への効果を明らかにする必要がある。

また、「自分の係がよくできたと思う」「一緒に発表している人の態度が気になった」「またやってみよう」「ずっと緊張していたけど、質問にも答えられた」などの記述があった。

3. 教師による評価

①社会生活に必要なスキル

あいさつをする場面において、自分から言う、相手を見て名前を加えて言う、いったん立ち止まって言う、などの行動が、多くの生徒に見られるようになった。場に応じた声の大きさなどにはまだ課題がある。

②就労への意欲

職業生活に関する学習では、活動前に準備をする、必要なものを確認するなど、上級生を中心に意欲的な行動が増えてきた。様々な体験活動を通して、意欲が高まりつつある。

③自己有用感・自己効力感等の内発的な意欲

集中して取り組めていなかった生徒が、活動の中で自分のすべきことをやりきる、認められるという経験を積み重ねを通じて、自ら集中して取り組もうとする姿勢が見られた。集団の中で自分の考えたことを表現することにためらいが少なくなった。

④自己の理解と把握による評価力

集団の中で、場の雰囲気をとらえ、自らの行動を調整しようとする場面が増えてきた。また、自らの苦手なことに対して、どのようにしたいかを言葉で表現で

きるようになった。一方で、できていないのに、できたと表現したり、その逆の場合もあったり、自己の活動を適切に把握して評価を行うことには課題がある。

⑤課題遂行力

作業活動では、少し難しいことになると途中でやめてしまうことのあった生徒が、スモールステップの課題設定や、得意な部分を任せるなどの支援によって、次の課題に進もうとする様子があった。

VII カリキュラム実施による保護者への効果と課題

本学級の保護者は、入学時教育相談時のアンケートや毎年行っている個別の教育支援計画・指導計画作成のためのアンケートにおいても、卒業後の進路として全員が就労希望である。また、校内に障害者雇用による環境職員2名(本学級の卒業生)が雇用されており、間近にその将来の様子をモデルとしてみることができることから、生徒たちは働くことを具体的に考えやすい環境があることから、総じて働くことや将来の社会生活の充実に向けた学習には期待が高い。

1. キャリアウィークの実施

今年度、6月にキャリアウィークⅠ、11月にキャリアウィークⅡとして、キャリアマネジメントの各単元の一部を一週間程度の期間にまとめて実施した。将来の進路に対する意識の高揚や進路に関わる情報提供を意図し、保護者や卒業生を巻き込んだ活動を組み込んで実施した。

6月15日(日)に行った「進路を語る会」では、本学級の生徒だけでなく、本学級の卒業生で構成する青年学級生と、保護者で構成する親の会の一同が会し、働くことや地域での暮らし、家庭での生活について、それぞれの立場から意見交換を行った。休日であったにもかかわらず、中学生の保護者は、ほぼ全員参加であり、関心の高さがうかがえた。事後の感想をみると「就労だけでなく、余暇の過ごし方、充実といった課題」を捉えたこと「進学や就労に関する情報を得られて参考になった」ことなど、これからの進路を考えていく動機付けになったようである。一方で「就職が決まるまでのいきさつについて話が聞きたい」という意見や「みんなで意見を出し合うので少し戸惑った」な

どがあり、保護者の、進路を語る会へのニーズの把握や会の進め方については課題があった。

2. 保護者アンケート調査の結果から

キャリアマネジメントの授業について、保護者がどのくらい知っているか(図5、図6)や、家庭での般化の様子(図7)について、キャリアウィーク実施後、11月にアンケート調査を行った。アンケートの記入にあたっては、4件法と記述を併用した。

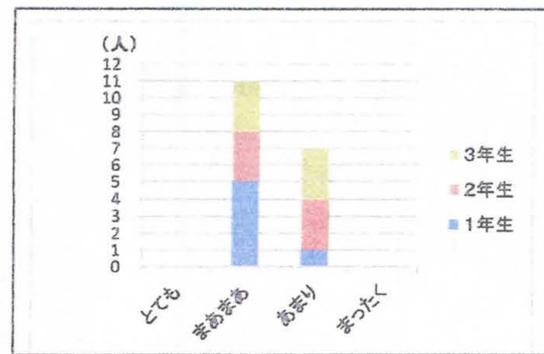


図5 キャリアマネジメントでどのような学習をしているか知っている

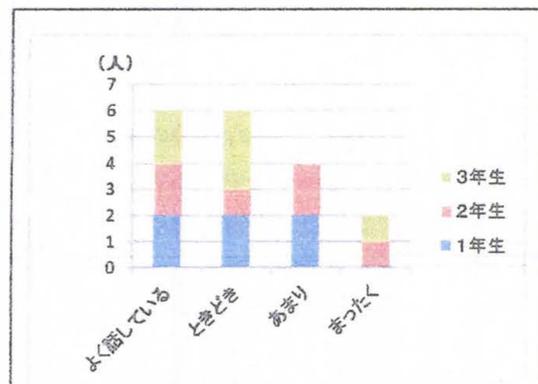


図6 キャリアマネジメントの授業で学習したことを家で話している

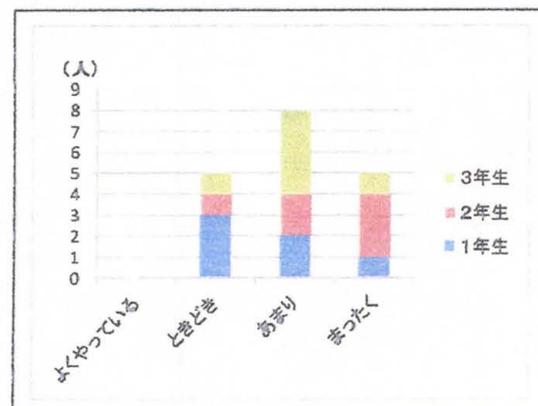


図7 キャリアマネジメントの授業で学習したことを家でもやっている

課題点として、生徒の多くは家庭で学習したことを話しており、日々の連絡帳や懇談等を通じて教師から情報を伝えているが、それだけでは十分保護者に学

習内容が伝わっていないことが示されている。今後、情報提供の工夫が必要である。

記述の中には、「他校にはない東雲中学校ならではの教科に大きな期待を寄せている」「子どもに必要な実体験をすることで、自信がついたり自立につながったりと、中学生になりとても成長したように思う」「自立に向けて、社会の中で自分と折り合いをつけながら選択する経験をお願いしたい」といった意見があり、保護者の期待が感じられた。

Ⅷ カリキュラム実施による教職員への効果と課題

3種類のアセスメント（S-W 社会生活能力検査，WISC-IV，TTAP）の実施とともに、生徒を対象にキャリア教育の基礎的・汎用的能力に関するアンケートを実施した。指導内容や方法，評価項目について検討するうえで、現在の生徒の姿から見直すという視点と、将来の生徒の姿を想定して見直すという視点の両方の重要性を教員の共通の視点として確認することができた。また、視察や広島県内特別支援学校高等部を対象としたアンケート調査により、中学校段階として指導することが望ましい内容を明らかにしていくにつれ、本校の実践で不足している部分、過剰な部分の検討を繰り返しながら、小中高のつながりの中での中学校段階の役割について整理し、より良い指導内容や方法，評価について検討しようとする意識が高まった。

Ⅸ 問題点と課題

1. 指導内容について

「職業・家庭」に加えた内容は、新たな内容となっているのか。従来のものを拡大解釈すれば含まれていないか、新たな内容となっているかを検討するとともに、具体的な活動が見える内容の確立にむけ今後も研究を進めていきたい。

2. 効果の検証

研究開発の効果の検証を、授業実践を通し行うことを目指し、授業改善に取り組んでいる。現段階での妥当な検証が行えているか。これまでの積み重ねの中で、実践資料は蓄積されてきているが、整理や分析についてまだ不十分なところが残されている。今後は資料の整理を行い、具体的な根拠を示しながら、効果を引き続き検証していきたい。

3. 学習評価について

評価方法については、4観点とキャリア教育の4能力

をクロスさせた、16項目の観点別による分析的な評価を試行した。さらに、各項目を生徒の成長の様子をとらえ、3つの内容に分けて評価を進めることとした。評価項目の多さによって、教員間で共通理解のもと授業を行っていくことやカンファレンスで共通の視点をもつこと等に難しさがあり、次の授業につなげていくことが十分に機能しているとは言えなかった。そこで、生徒の様子を的確に捉え次の授業につなげる評価を適切に行うために、評価する生徒を絞って試行した。この方法によって、対象とした生徒の成長を授業担当者が把握し、授業後のカンファレンスでは対象生徒の様子や支援の有効性等について協議をすすめることができ、次の授業における目標設定や支援方法の改善、教材の工夫等、次の授業につなげる改善点が明らかになった。また、「キャリアマネジメント」で育てたい資質や能力を意識し、評価の観点を絞って授業づくりを進めていくことが必要ではないかとの指摘もあった。今後は、教員間の共通理解に基づく適切な評価が行えること、また、すべての生徒の成長や授業評価を適切に把握するための指標になるよう、実践と改善や工夫の繰り返しを行い、適切な評価方法を確定していきたい。

参考文献

- 石塚謙二：知的障害教育における学習評価の方法と実際，ジアース教育新社，2012。
- 文部科学省：特別支援学校学習指導要領，2009
- 上岡一世：社会生活スキルUPをめざす授業づくり，明治図書，2011。
- 渡辺美枝子：新版 キャリア教育の心理学 キャリア支援への発達のアプローチ，ナカニシヤ出版，2013。
- 渡辺美枝子：教科のできるキャリア教育，図書文化，2009。

The Curriculum Development to foster the Ability to Live in the Society Aimed at Social and Vocational Independence in Special Support Class of Junior High School

In the society with the progress of the globalization, it is necessary to develop a new curriculum in order to foster the ability to live for the future life including career. The curriculum has 'Vocation and home' with a new subject 'Career Management' with the content about a social life. Each unit of the lessons were evaluated with a criteria referenced evaluation and four abilities of career. From the result, the lessons were improved and the effect of the curriculum was measured. As a consequence, to utilize the curriculum was effective in a degree for students, their parents, and teachers. However it is a future problem to make a review of the contents of the instruction and the lessons and examine a way of the evaluation.

Key words : Special support education, Career education, Learning evaluation, Class improvement